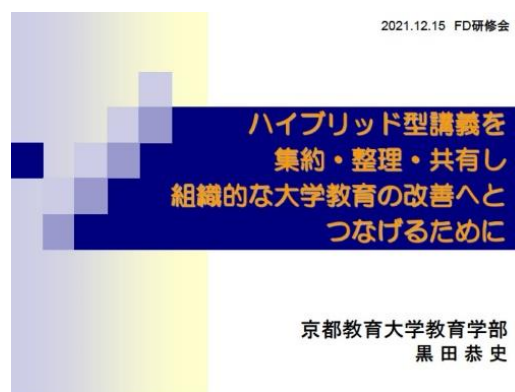

本学におけるFD活動の一環として実施しております「授業アンケート」へのご理解とご協力を感謝申し上げます。

今回のFDニュースでは、「2021年度第2回FD研修会」、「2021年度大学院教育学研究科授業アンケート」、「2021年度後期授業アンケート活用状況調査及び中間アンケート実施調査結果」について報告いたします。

1. 2021年度第2回FD研修会の報告

2021年12月16日に、数学科の黒田恭史先生より、「ハイブリッド型講義を集約・整理・共有し、組織的な大学教育の改善へとつなげるために」というテーマでご講演をいただきました。講演前半では、黒田先生が代表で進めている教育研究改革・改善プロジェクトの一部であるランチョンセミナーから、本学教員が実践したコロナ禍でのオンライン授業、対面とオンラインの併用事例などが紹介されました。そこでは、実技授業でオンデマンド動画を活用した事例、オンラインと対面のどちらにも対応した実践事例、対面授業時でのコメント収集・共有にオンラインを活用した事例などが紹介され、オンライン授業での苦勞や得た工夫は、授業の新しい形として活用できる可能性を示唆するものでした。また、この2年間は授業を欠席せざるを得ない学生が多くなっており、オンデマンド動画は学生の個別の困りごとに寄り添えるものであろうという考えも述べられました。



講演後半では、近年の学校において日本語指導が必要な子どもの急増、不登校、長期欠席児童・生徒の急増が進んでいるデータが提示され、今そして未来の学校に対して学生が身に付けていくべき力と、教員養成大学としてできる事（すべき事）に関する提案がありました。

参加された先生方からは、「先生方の授業例は大いに刺激になった」、「先生方の工夫がわかり、オンライン授業のメリット・デメリットを理解して組み入れていく必要性を感じた」、「お互いの取り組みを理解する機会があることは有益」というように各教員の工夫をさらに知りたいという意見が見られました。また、「個別に見た場合のオンライン授業の適・不適の教科等について考えたい」、「領域・教科によって活用に異なる面がありそうで、専門のところでは何ができるかを考えていくことが重要」、など、より深い議論をしていくべきという意見も見られました。

大学としてのオンライン授業の活用は始まったばかりですが、学生が経験したオンライン授業は、授業内容を学ぶこと以外に、卒業後に教員として行うオンライン授業やICT利活用の方法に大きく影響することと思います。今後も大学におけるオンライン授業やICTの活用について、領域や教科をまたいだ先生方の多くの事例の共有や、全体としての議論ができる場や機会が必要であらうと思われました。

参加者数は85名でした。ご参加いただき、ありがとうございました。

2. 2021年度大学院教育学研究科授業アンケート調査結果

2021年度の大学院教育学研究科の授業アンケートについてご報告いたします。

回答者数は、学校教育専攻が25名中7名(28%)、障害児教育専攻8名中3名(37.5%)、教科教育専攻65名中21名(32.31%)でした。全体の回答率は33.67%(98名中33名)で、2019年度の42.61%(115名中49名)、2020年度の36.36%(110名中40名)に比べて著しく低いわけではないものの、2019年度から回答率を約6%下げた2020年度よりも、さらに3%ほど下がった数字となっています。

その反面、授業に対する肯定的な回答の割合は、2019年度、2020年度に比べて明らかに増えています。

「2. 授業への取り組みの意欲」、「3. 授業に対する満足度」、「5. 授業は体系的であったか」、「6. 受講生の反応に配慮していたか」、「7. 教員となるうえで役立ったか」の五つの設問に関しては、どの専攻でも肯定的な上位二つの回答（とても～、やや～）でほぼ100%となっています。この点は、2019年度も2020年度も同じです。しかし、最も肯定的な回答（とても～）の割合の平均は2021年度では約82.1%であり、2019年度の65.6%、2020年度の約62.4%を大きく上回っています。

この結果は先生方の授業改善の努力の成果であるとも解釈できますが、先に述べたように回答率が低いことから、授業への意欲の高い学生だけがアンケートに回答したことが反映しているとも考えられます。

その他の設問について述べると、シラバスに関して「やや参考にならなかった」という否定的な回答の割合が25%となっており、おおよそ10%に留まっていた2019年度、2020年度に比べて顕著に増えている点に気がなります。反対に授業の難易度に関しては、「とても難しかった」が25%を占めた2019年度、「やや易しかった」が32%を占めた2020年度に対して、回答は「やや難しかった」に集中しています（約85%）。学びである以上或る程度の集中力、つまり理解の難しさが必要であることを考えると、2021年度の授業の難易度は、おおむね適切なものと受講生から評価されていると言えます。

受講生が現職教員とストレートマスターで構成されている点に関しては、経験の豊かな現職教員の発言の時間が多くなり、ストレートマスターの発言する機会が少なくなりがちだという回答が多く寄せられました。この不満は例年聞かれるもので、授業で議論を行う際には現場経験のない、あるいは乏しい学生にも発言の機会を保障することは、授業者が今後特に留意し、工夫をしていくべき課題となっています。

3. 2021年度 後期授業アンケート活用状況調査及び 中間アンケート実施調査結果

2021年度後期の授業アンケート活用状況調査、および授業中間アンケート実施結果調査の結果をご報告します。アンケートの回答件数は、紙面とwebを合わせて53件でした。（紙面34件、Googleフォーム17件）

I. 授業アンケート結果（期末実施分）の活用状況について

問1. 過去の授業アンケートの結果を2021年度後期の教育学部の授業に反映させている。

「はい」→44 「いいえ」→1 「過去に未実施」→8 「無回答」→0

問2. 授業に反映させていない理由についてお聞かせください。

・これまでのアンケートから特に反映させるべき課題がみられないため ・本年度からの出講

問3. 授業に反映された内容についてお聞かせください。（複数回答可）

回答区分	回答数	反映した数（44）に対する比率
時間外の学習時間を見直した	6	13.6%
意欲的に取り組めるよう対応した	17	38.6%
テーマ・領域を見直した	2	4.5%
教職への意欲・動機が高まるよう対応した	12	27.3%
難易度を見直した	8	18.2%
体系的でまとまった授業を心掛けた	12	27.3%
授業の説明をわかりやすくした	17	38.6%
テキスト（配布資料など）のレベルを見直した	7	15.9%
速度（進度）を見直した	10	22.7%
受講生の理解や反応を受けとめるようにした	12	27.3%
その他	2	4.5%
【その他の回答内容】		
<ul style="list-style-type: none"> ・レジメに記入するところを設定して講義に集中できるようにした ・温度調整 		

8割以上の先生方が、アンケート結果を授業に反映していると回答されています。反映した内容としては、「意欲的に取り組めるようにした」、「授業の説明をわかりやすくした」が17名と最も多く、続いて「教職への意欲・動機が高まるよう対応した」、「体系的でまとまった授業を心掛けた」、「受講生の理解や反応を受けとめるようにした」（いずれも12名）が多くなっています。

II. 2021年度後期授業中間アンケートの実施結果調査について

問1. 独自作成のものも含め授業中間アンケートを実施した。

「はい」→ 42 「いいえ」→ 12

問2. 授業中間アンケートをしなかった主な理由についてお聞かせください。

少人数のため

- ・少人数（10人以下）のため
- ・少人数のため直接意見を聞いた
- ・受講生が少数（4名）で、かつ、前期から引き続き履修しているため、各自の習熟度は把握しているため。

実施時間が確保できない

- ・実施の時間が確保できなかった
- ・授業を進めるべきと考えたため。
- ・時間が取れなかった。しかし、学生からは反応を絶えず聞いている。

必要性を感じない

- ・受講生が熱心に授業に取り組んでおりアンケート（中間）実施の必要性を感じなかった
- ・授業の際、学生から進行速度や内容の理解度などを聞き取りしているため
- ・共通のアンケートで充分と思われるため

その他

- ・タイミングを計りかねている為

問3. 使用した様式についてお聞かせください。

「FD委員会の様式」→ 36 「独自の様式」→ 6

問4. 中間アンケートを実施した結果についてお聞かせください。

「意義があった」→ 22 「どちらかという意義があった」→ 16

「どちらかという意義がなかった」→ 3 「回答なし」→ 1

問5. 授業中間アンケートの結果について、受講生と話し合ったり言及したりされましたか。

「はい」→ 31 「いいえ」→ 9 「回答なし」→ 2

問6. 授業へ中間アンケート結果を反映された内容についてお聞かせください。（複数回答可）

回答区分	回答数	反映した数(41)に対する比率
時間外の学習時間を見直した	4	9.8%
意欲的に取り組めるよう対応した	12	29.3%
テーマ・領域を見直した	2	4.9%
教職への意欲・動機が高まるよう対応した	7	17.1%
難易度を見直した	8	19.5%
体系的でまとまった授業を心掛けた	6	14.6%
授業の説明をわかりやすくした	17	41.5%
テキスト（配布資料など）のレベルを見直した	8	19.5%
速度（進度）を見直した	13	31.7%
受講生の理解や反応を受けとめるようにした	13	31.7%
その他	8	19.5%
【その他の回答内容】		
・学修の考え方について追加で説明した		

- ・受講者相互の意見交換に Google Forms を活用した
- ・PPT の見やすさ向上
- ・マイクの回し方を変えて授業がまのびしないようにした
- ・配布関係資料を増やした。 ・空調
- ・試験問題の説明をわかりやすくした ・「説明のくどさ」をシンプルにした

問7. FD 委員会様式の「授業中間アンケート」の設問について、お聞かせください。
「改善の余地あり」→ 6 「現状のままでよい」→ 38 「回答なし」→ 9

問8. 問7について具体的にお聞かせください。

「改善の余地あり」

設問の選択肢

- ・「ちょうどよい」という欄がほしい

Google フォーム等での実施

- ・Google form で回答できるようにしてほしい
- ・集計等がしやすいようにフォーム等での実施できてもよいかと
- ・Google フォームに項目は同じ内容で掲載した。紙は書きにくいと思われる。また、集計が大変である。
- ・受講者が留学生で来日できていない学生もいますので、中間アンケートは Microsoft Forms にアンケートを作ってオンラインで回答してもらいました。紙媒体以外より集計が楽でした。

その他

- ・授業時間が削られるので、授業内ではなく授業外でアンケートに回答させてほしい。

「現状のままでよい」

- ・今の内容で意見を十分受け止めることができるから

42名の先生方が、中間アンケートを実施したと回答されました。様式は、FD 委員会のものを使用したという回答が大半でしたが、独自の様式を使用した方も6人いました。中間アンケートの実施に「意義があった」、「どちらかというとな意義があった」という回答を合計すると9割以上となり、授業改善に役立てられていることがわかります。結果を反映した内容として、最も多かったのは「授業の説明をわかりやすくした」(17名)という回答で、続いて「速度(進度)を見直した」、「受講生の理解や反応を受けとめるようにした」(13名)という回答が多く見られ、先生方が学生の声を真摯に受け止め、授業をよりよいものにしようと努力されていることがうかがえる結果となりました。

FD 委員会様式の「授業中間アンケート」については、「現状のままでよい」という回答が多く見られた一方で、改善に向けてのご意見もいただきました。特に、Google フォーム等を活用し、オンラインで実施できるようにしてほしいというご意見が、複数の先生方から寄せられました。オンラインでのアンケート実施については、FD 委員会で何度も議論を重ねていますが、メリットとともにさまざまな課題も見えてきました。授業中間アンケートについては、先生方が独自の方法で行っていただくことも可能になっていますので、Google フォーム等も積極的にご活用のうえ、アンケートを実施していただければと思います。

内容について、問い合わせなどがありましたら、下記の委員までお願いいたします。

FD委員会委員：中(委員長)、小山(副委員長)、樋口、荻野、東村
(事務担当：河原田、村田、長谷川)